

金太郎

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、金太郎きんたろうという強い子供つよ こどもがありました。相模国さがみのくに足柄山あしがらやまの山奥やまおくに生まれて、

おかあさんの山うばといつしよにくらしていました。

金太郎きんたろうは生まれた時ときからそれは力が強くつて、もう七つ八つのころには、石いしう

臼すやもみぬかの俵たわらぐらい、へいきで持ち上げました。大抵たいていの大人おとなを相手あいてにすもうを取と

つても負けませんでした。近所きんじよにもう相手あいてがなくなると、つまらなくなつて金太郎きんたろうは、

一日いちにもり森の中をかけまわりました。そしておかあさんにもらつた大きなまさかりをかついで

歩いて、やたらに大きな杉すぎの木や松まつの木をきり倒たおしては、きこりのまねをしておもしろが

つていました。

ある日もり森の奥おくのずっと奥おくに入はいつて、いつものように大きな木を切きつていますと、のつそ

り大きな熊くまが出て来きました。熊は目を光ひからせながら、

「だれだ、おれの森もりをあらすのは。」

と言いつて、とびかかつて来きました。すると金太郎きんたろうは、

「何だ、熊のくせに。金太郎を知らないか。」

と言いながら、まさかりをほうり出して、いきなり熊に組みつきました。そして足がらをかけて、どしんと地びたに投げつけました。熊はへいこうして、両手をついてあやまって、金太郎の家来になりました。森の中で大将ぶんの熊がへいこうして金太郎の家来になったのを見て、そのあとからうさぎだの、猿だの、鹿だのがぞろぞろついて来て、

「金太郎さん、どうぞわたくしも御家来にして下さい。」

と言いました。金太郎は、「よし、よし。」とうなずいて、みんな家来にしてやりました。

それからは金太郎は、毎朝おかあさんにたくさんおむすびをこしらえて頂いて、森の中へ出かけて行きました。金太郎が口笛を吹いて、

「さあ、みんな来い。みんな来い。」

と呼びますと、熊を頭に、鹿や猿やうさぎがのそのそ出て来ました。金太郎はこの家来たちをお供に連れて、一日山の中を歩きまわりました。ある日方々歩いて、やがてやわらかな草の生えている所へ来ますと、みんなは足を出してそこへごろごろ寝ころびまし

た。日がいい心持ちそうに当たっていました。金太郎が、

「さあ、みんなすもうを取れ。ごほうびにはこのおむすびをやるぞ。」

と言いますと、熊がむくむくした手で地を掘って、土俵をこしらえました。

はじめに猿とうさぎが取り組んで、鹿が行司になりました。うさぎが猿のしつぽをつ

かまえて、土俵の外へ持ち出そうとしますと、猿がくやしがつて、むちゃくちやにうさ

ぎの長い耳をつかんでひっぱりましたから、うさぎはいたがつて手をはなしました。それ

で勝負がなくなつて、どちらもごほうびがもらえませんでした。

こんどはうさぎが行司になつて、鹿と熊が取り組みましたが、鹿はすぐ角ごと熊にひ

つくり返されてしまいました。金太郎は、

「おもしろい、おもしろい。」

と言つて手をたたきました。とうとういちばんおしまいに金太郎が土俵のまん中に

つつ立つて、

「さあ、みんなかかつて来い。」

と言いながら、大手をひろげました。そこでうさぎと、猿と、鹿と、いちばんおしまい

に熊がかかつていきましたが、片っぱしからころころ、ころがされてしまいました。

「何だ。弱虫だなあ。みんないつぺんにかかつて来い。」

と金太郎が言いますと、くやしがつてうさぎが足を持つやう猿が首に手をかけるやら、大さわぎになりました。そして鹿が腰を押して熊が胸に組みついて、みんな総がかりでうんうんいつて、金太郎を倒そうとしましたが、どうしても倒すことができませんでした。金太郎はおしまいにじれったくなつて、からだを一振りうんと振りますと、うさぎも猿も鹿も熊もみんないつぺんにごろごろ、ごろごろ土俵の外にころげ出してしまいました。

「ああ、いたい。ああ、いたい。」

とみんな口々に言つて、腰をさすつたり、肩をもんだりしていました。金太郎は、

「さあ、おれにまけてかわいそうだから、みんなに分けてやろう。」

と言つて、うさぎと猿と鹿と熊をまわりにぐるりに並ばせて、自分がまん中に座つて、おむすびを分けてみんなで食べました。しばらくすると金太郎は、

「ああ、うまかつた。さあ、もう帰ろう。」

と言つて、またみんなを連れて帰つていきました。

帰^{かえ}って行く道^{みち}々々も、森^{もり}の中でかけつくらをしたり、岩^{いわ}の上で鬼^{おに}ごっこをしたりして遊^{あそ}び遊^{あそ}び行くうちに、大きな谷^{たに}川^{がわ}のふちへ出ました。水はごうごうと音^{おと}を立てて、えらい勢^{いきお}いで流^{なが}れて行^いきますが、あいにく橋^{はし}がかかつていませんでした。みんなは、

「どうしましょう。あとへ引^ひき返^{かえ}しましょうか。」

と言^いいました。金太郎^{きんたろう}はひとりへいきな顔^{かお}をして、

「なあにいいよ。」

と言^いいながら、そこらを見^みまわしますと、ちょうど川^{かわ}の岸^{きし}に二^{ふた}かかえもあるような大きな杉^{すぎ}の木^きが立^たっていました。金太郎^{きんたろう}はまさかりをほうり出^だして、いきなり杉^{すぎ}の木^きに両^{りょう}手^てをかけました。そして二、三度ぐんぐん押^おしたと思^{おも}うと、めりめりとひどい音^{おと}がして、木^きは川^{かわ}の上にどっさりと倒^{たお}れかかつて、りっぱな橋^{はし}ができました。金太郎^{きんたろう}はまたまさかりを肩^{かた}にかついで、先^{さき}に立^たって渡^{わた}っていきました。みんなは顔^{かお}を見^み合^あわせて、てんでんに、

「えらい力^{ちから}だなあ。」

ときさやき合^あいながら、ついて行^いきました。

その時^{とき}向^むこうの岩^{いわ}の上にきこりが一人^{ひとり}かくれていて、この様^{よう}子^すを見^みていました。金太^{きんたろ}

郎がむぞうきに、大きな木をおし倒したのを見て、目をまるくしながら、

「どうもふしぎな子供だな。どこの子供だろう。」

と独り言を言いました。そして立ち上がって、そつと金太郎のあとについて行きました。うさぎや熊に別れると、金太郎は一人で、また身軽にひよいひよいと谷を渡つたり、崖を伝つたりして、深い深い山奥の一軒家に入つていきました。そこいらには白い雲がわき出していました。

きこりはそのあとからやつと木の根をよじたり、岩角につかまったりして、ついて行きました。やつとうちの前まで来て、きこりが中をのぞきますと、金太郎はいろりの前に座つて、おかあさんの山うばに、熊や鹿とすもうを取った話をせつせとしていました。おかあさんもおもしろそうに、にこにこ笑つて聞いていました。そのときこりは出しぬけに窓から首をぬつと出して、

「これこれ、坊や。こんどはおじさんとすもうを取ろう。」

と言いながら、のこのこ入って行きました。そしていきなり金太郎の前に毛むくじやらかな手を出しました。山うばは「おや。」といつてふしぎそうな顔つきをしましたけれど、金太郎はおもしろがつて、

「ああ、取ろう。」

と、すぐむくむく肥ったかわいらしい手を出しました。そこで二人はしばらく真つ赤な顔をして押し合いました。そのうちきこりはふいと、

「もう止そう。勝負がつかない。」

と言つて、手を引つ込めてしまいました。それから改めて座りなおして、山うばに向つて、ていねいにおじぎをして、

「どうも、だしぬけに失礼しました。じつはさつきぼっちゃん、谷川のそばで大きな杉の木を押し倒したところを見て、おどろいてこまでついて来たのです。今また腕ずもうを取つて、いよいよ大力なのおどろきました。どうしてこの子は今にえらい勇士になりますよ。」

こう言つて、こんどは金太郎に向かつて、

「どうだね、坊やは都へ出てお侍にならないかい。」

と言いました。金太郎は目をくりくりさせて、

「ああ、お侍になれるといいなあ。」

と言いました。

このきこりと見せたのはじつは碓井貞光といって、その時分日本一のえらい大将で名高い源頼光の家来でした。そして御主人から強い侍をさがして来いという仰せを受けて、こんな風をして日本の国中をあちこちと歩きまわっているのです。山うばもそう聞くと、たいそう喜んで、

「じつはこの子の亡くなりました父も、坂田というりっぱな氏を持った侍でございました。わけがございましてこのとおり山の中に埋もれておりますものの、よいつてさえあれば、いつか都へ出して侍にして、家の名をつがせてやりたいと思っております。そういうことでしたら、このとおりの腕白者でございますが、どうぞよろしくお願い申します。」

とさもうれしそうに言いました。

金太郎はそばで二人の話を聞いて、

「うれしいな、うれしいな。おれはお侍になるのだ。」

と言つて、小踊りをしていました。

金太郎がいよいよ碓井貞光に連れられて都へ上るといふことを聞いて、熊も鹿も

猿もうさぎもみんな連れ立ってお別れを言いに来ました。金太郎はみんなの頭を代わり

ばんこになでてやつて、

「みんな仲よく遊んでおくれ。」

と言いました。みんなは、

「金太郎さんがいなくなつてさびしいなあ。早くえらい大將になつて、また顔を見せて下さい。」

と言つて、名残惜しそうに帰つていきました。金太郎はおかあさんの前に手をついて、

「おかあさん、では行つてまいります。」

と言いました。そして、貞光のあとについて、とくいらしく出ていきました。

それから幾日も幾日もかかつて、貞光は金太郎を連れて都へ帰りました。そして頼光のおやしきへ行つて、

「足柄山の奥で、こんな子供を見つけてまいりました。」

と、金太郎を頼光のお目にかけました。

「ほう、これはめずらしい、強そうな子供だ。」

と頼光は言いながら、金太郎の頭をさすりました。

「だが金太郎という名は侍にはおかしい。父親が坂田というのなら、今から坂田金時と名乗るがいい。」

そこで金太郎は坂田金時と名乗つて、頼光の家来になりました。そして大きくなると、えらいお侍になって、渡辺綱、卜部季武、碓井貞光といっしよに、頼光の四天王と呼ばれるようになりました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金太郎

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>